
東方望郷夢

黒い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方望郷夢

【Nコード】

N4769I

【作者名】

黒い人

【あらすじ】

【注意書きとか】

1、この物語は二次創作です。原作者様とは一切の関係がございません。

以下の作品をクロスオーバーさせていただきました。

・「Axis Powerヘタリア（APH）」（日丸屋秀和氏原作）

webマンガ程度の知識が必要です。

・東方Project (ZUN作)

東方シリーズを何度かプレイした程度の知識が必要です。

2、ヘタリアは地理的な意味合いとして国名を使用するので
各々につけられているキャラクター名を使用します。

各々のキャラクターの立場などは作中公開します。

(もちろん現実の世界の国とか出来事にはほとんど関係ありません)
(と、言うことになってます)

3、BL・GL要素はありません。その要素を色濃く出す場合には
チェックをつけた上で題名に【BL・GL要素あり】と表記します。
読まなくても影響がないようにしたいです。

設定とか（前書き）

設定とかが乗る予定です。

設定とか

【登場人物紹介】

「東方サイド」

射命丸文 しゃめいまる ふみ

天狗会報道部の烏天狗のカメラマン（発音がよい）
幻想郷入りしてきた外来人に興味があるが、仕事があるといって帰ってしまった。

犬走椛 いぬばしりつ もみじ

天狗会偵察部白狼天狗の少女。
外来人を「監視」すべくきたが年上である文にルートヴィッヒをおしつけられる。

「ヘタリアサイド」

ルートヴィッヒ（20）

この物語の主人公。

いつのまにか幻想郷入りしていた不憫。

く約束く

暗黒。男のいる場所はまさにそんな場所だった。

眼をあけた。いや、あいていない。

助けを呼ぶべく腹に力をいれた。口がない。

まるで塩をかけられたナメクジのように、少しずつ「自分」が消えていく。

恐怖。戸惑い。使命感。悲愴。抗い。

一気に湧き上がる。けれども、具体的な内容は何一つ思い出せなかった。

手、が伸びた気がする。それに 男よりも小さな、若いカエ

デのような

手が 触れた と思う。

『 『

顔、か。唇。柔らかい唇が、「眼」に、「鼻」に、「唇」に。

落とされる。闇の中見えるはか弱い輪郭。 男はそのまま、

少女を抱きしめたいと思った。しかしそれは叶わない。

抱きしめるだけの腕がない。口付けた場所もまた、闇に飲まれていくのを

感じた。

『 と、・・・と・・・』

【大丈夫だ、*****
言ってみる。お前の言葉を。ちゃん
と聞いてから行こうと思っ】

男は已にできる一番の笑顔で答えた。少女の声が歪んだ。
嗚咽。

『かえってきて。約束して・・・ひう、かえってぎ
』

少女の叫ぶような声。終わる前に闇が男をかつさらっていく

【また 約束を 破ってしまった】

こんどは まもれるだろうか・・・ 口元を苦く歪ませながら。
男の意識は闇の中に消えていく。

>> 作品管理トップへ戻る 一 小説編集 一 仮想ケータイ表
示

1、覚醒

湿った風の匂い。夢とは間逆のゆるやかさに、男は目を覚ました。真昼の太陽が男の網膜をうっかり焼き付ける。閉じる。それほどまでに暗い場所にいままでいたのだろうか。そんな独り言が漏れる。

体を横にしてから改めて細目を開けてみた。硬い・・・岩の上のようだ。

少し指先を動かすと、体温の恩恵をうけていない石の冷たさが伝わってくる。チンチンと鳥が威勢よくなき、サラサラと川が海へと流れる音が聞こえた。

上流特有のゴツゴツとした岩。・・・その合間を縫い流れていく。

そして水は岩の角をとりさらっていく。少しずつしかし、着実に。

・・・起き上がる。頭痛。酷く鈍い痛みだった。

視界に入るの是一片の森、広葉樹だ。

懐かしい匂いと花が一瞬　消える。

広がる男の故郷にはない植物群。

人間の存在は大きい。

ビクリ。

怯えた鹿が足をはねさせて森の奥へと消えていく。

「・・・」

喉仏が枯れている。男は黒い手袋の嵌った手で喉をなでた。カサカサしている。

唇に触れた。「まだあの感触がのこっている」
思い出してはじらいに浸るほどの余裕がない。

鈍痛をこらえるべく眉間に皺を刻みながら周囲を見た。

川原。森。森。空。森。鳥。天使・・・天使？

なんと非科学的な。しかし鈍痛を感じているところから夢ではなさそうだった。

白いブラウスに黒のミニスカート。小さな紅いかむりものに大きなかえでの内輪をもつ、少女。背には黒い羽をたずさえ、こちらにむかってくる。

正確には、大気圏突入ヨロシク。鈍痛追加記念日。少女の速度は泊まらず、

男のみぞおちの中心に頭がめり込む形。

「ガ・・・ッッ！！！」

幸い、あのなかでは何も食べていなかったらしい。
吐き出されたのは胃液だけだった。少女はそれを察してか、
かかる前に空にもどる。熱をもった胃が落ち着く様子はなく、
ドリルでもねじこまれたようだった。岩の上でうずくまりながら、
少女を見上げる。

「あやややや、失敬。いや、椀一（もみじ）の術の威力を試そうと
思いましたね。

いやー、これは無理ですね。ボツです。でもいい顔ですねえ、踏ん
でいいですか？」

「。。。。。」

「いえいえ、2割くらい冗談ですよ。」

あとの8割は、と言う言葉を呑んだ。男はこの手の人間を問い詰め
れば問い詰めるほど

自分が不利になることを学んでいる。知っている。

何か大切なものを蝕んでいく鈍痛を抑えながら男は少女を見上げた。
桃色のおぼんつが見えた。

が、そんなことを気にしている場合ではない。それも「男は知って
いる」。

「 貴様の冗句に付き合っているヒマはない。それより。

ここは一体どこだ。……………なぜ非科学的な人間が目の前に
いるのだ。

10秒以内で答えろ！」

「おお、うざいうざい。折角、助けてあげたのに。いやいや、まあ

男性が
侵入してきたというだけ幻想郷大、スクープでしょうねえ。なんと
って

計算しつくされたように女性率が多いですからネエ。ここ。」

少女は相手にすらしようとしない。

話を続ける。

「貴方は丁度この 博霊大結界の「はじまり」にいました。

そこでわけの分からないことを口走っていて

うるさかったので気絶させてあげたのです。丁度、昨日の夜でした
ね。

本当、ルーミアがいなくてよかったです。夜雀なら

簡単におっぱらいましたが、彼女だとさすがの俊足の私でも

難しかったかもかもしれませんから」

「は？はくれいだいけっかい？よるすずめ？るーみあ？」

「おっと、ここからは有料ですよ。外の世界風にいえば”等価交換

”です」

少女の笑顔がまぶしい。男は双眸を伏せた。声を聞く。

「貴方のことを記事にしたいのです。

外からの人間は最近珍しくありません。けれども 個人的に興味
を持ちました。

遠まわしに言えば貴方は”普通の迷い人”ではないということですよ。

「

何が言いたい」

「要は貴方を記事にしたいだけです。その質疑応答に答えてくださ
れば、

貴方の質問にも答えましょう。」

男は喉仏を上下させ、唸る。視線をあたりにめぐらせる。後、少女の顔を見る。

少女はただ笑っている。男の答えを知っているように。腹をくくる。たまった息が吐き出された。

「……質問は三つまで。一回につき三分厳守。貴様が一回質問することに、オレが一つ質問をする。時間は三分。その条件ならばのんでやろう。」

「どこの政府官邸ですか。まあいいでしょう。予想以上に頭が回りますね。では時間もないことですし、早速質問をしましょう。貴方の基本個人情報をお教えください」

背後に白い気配を感じる。怯えている子犬の気配。男は肩で大きく息を吐く。

「……名前はルートヴィツヒ。年齢は20歳。

「……神に愛された娘”エウロペ”の名が与えられた地の一つに住んでいる(……………)

「……兄がいる。(……………)……友人はフェリシアーノ”ヴァルガス。

そして、本田菊……(……………)……好きなものはビールとじゃがいもとヴルスト、だ」

「きっかり三分ですね。感心します。」
少女は筆を走らせている。

「……質問だ。ここはどこだ、ヨーロッパから、どの程度の距離にある？ついで貴様は誰だ」

駄々をこねる子のように暴れ始めた頭痛をこらえながら男は、唸るように問う。

「仕方ない男ですね。ここは幻想郷。古くは倭の国、貴方たちの言葉で言えば”日本”にある
オトメの花園です。男性が無為に立ち入っていい場所ではありませんね、全く。」

ヨーロッパは私なら一日でつけると思いますが、船を利用するのであれば10日以上は

かかるんじゃないですか？・・・ 私は射命丸文。烏天狗です。と、3分でおさまってますかねえ？」

「5秒残しているな」

「いやはや、厳しいですね。」

重みが消え、いかにも少女らしいかおつきになった。まっすぐな視線は交錯しない。

「では私から。貴方は故郷に帰るといいました。どこへ、なんのために？」

「ヨーロッパ。生まれ故郷だ・・・ なんのため。そこに故郷があるからだ。」

「まだ2分以上ありますね。ヨーロッパは（そうして文は手帖をめくる）

現在EUと呼ばれる連合がありますが、一つ一つは独立した国でしょうか？」

そのどこなのでしょう。イングランド？それともポルトガル・・・ えっと」

【ノイズ】

「.....」

尻をつき、深いため息を吐く。

鈍痛が脳幹へと逃げていく感覚。見えない手でつかもうとしても

すりぬけ、忘れたものを奪われたまま消えていく。
みえているはずの美しい自然は見えず。
ただ底意地の悪い少女の顔も閉ざされる。

「3分、たちましたよ。ルートヴィッヒさん。 . . . まあ
その顔をみれたのでよしとします。」

少女の顔が見えない。
「最後です。貴方のような男は他にもいるのですか？」
少女の、文の声で男の眼は脳みそから現実に向くようになる。
見上げると、によによと好意が吹っ飛ぶような笑顔がそこにあった。
苦手だ。男は小さく、あきらめたように言葉を漏らした。

「 . . . ここにきているかは知らん。が、いるはずだ。 . . . 名前
前は、さっき言った二人。
どちらも男だ。オレと大体同い年 . . . だと思っ。ただ、”オレのよ
うな男”という質問なら
否。 . . . 同じ空間に同じものは同時に存在できない。アルバート・
アインシュタインの
相対性理論に基づく世界であるなら。 . . . 貴様はその法則とは離
れているな。

オレからの質問だ . . . ここが幻想郷ということは分かった。出る
方法はあるのか。」
少女は腕を組んで考えるそぶりをみせた。
日は少しばかり西に傾き始めている。
影が伸び、背後の白い気配も。はじめのリンとした緊張感を抱いて
いない。

「 . . . 幻想郷は迷い込むことがあります。スキマ妖怪、一八雲紫

「やくも・ゆかり」が気まぐれで、
もしくはこの幻想郷に必要と思ったときに”神隠し”という現象を
もってこっちに”呼び込む”のです。

基本的にこの幻想郷を保つ”博霊大結界”には虫一匹入ってこられ
ません。例外として。

一人と二柱いましたがね、神社ごと移動した猛者が。が、それは特
別な力があつたから。貴方のような

か弱い人間は出入りができません。つまり、私自身ならともかく、
貴方”だけ”ここから出る方法は

一つしかありません。それは・・・おっと。ここで三分ですね。」

文は何か言いたげなルートヴィツヒを尻目にパッと離れた。

背後の気配も、同時に消える。水に落ちる音が聞こえた。同時の悲
鳴。

しかし振り返る余裕はない。蒼と黒の交錯。ザバザバと上る音がす
る。

振り向かない。対峙する。古典的電球を思い浮かべた。

「時間外労働はしない夕チなので、残りはその後ろの犬にききなさ
い。ほら、椀。」

大将棋なんてやってないでちゃんと術もできるようにしないと大天
狗様が

怒りますよ？できるようになるまでルートヴィツヒと一緒にいなさ
い。

私は忙しいのでこれで失礼しますよ。」

「そ、そんなあつ！ わたしは千里見通せる能力があるのにい」

「暇なうちに爪をとがないでいてはいつなにかあるか分かりませ
んよ。」

また”月”にいくかもしれないのですから。

そういうわけで私は新聞をつくりにいつてきます。

ルートヴィツヒ。何か思い出したら記事にしたいのでちゃんと
思い出して置いてください。新鮮なネタがなかったら私の新作のス
ペカで

踊っていただきます。もちろん椀、貴方が”瞬間移動の術”ができ
なかったら

一緒によけてもらいますよ。それでは。」

「うわああん！まってください、射命丸さまあああっっ！」

ひゅーん

椀の絶叫が届く前に文は風を繰り、いずこへと消えてしまっていた。
岩の上に残されるのは。

ぬれそぼった犬耳の少女、「椀」とイカツイ男、「ルートヴィツヒ」という凸凹な組み合わせ。

「……えっと。あの……よろしくお願いします。」

「……体を拭け。話はそれからだ。」

幻想郷の森はゆっくりと紅に、そして紺色に染まっていく

1、覚醒（後書き）

pixivで調べると、東方×ヘタリアはめずらしくなさそうなので少しだけ凹みました。

微笑動画はヘタリア関連厳しいという
思い込みがあったのでノーマークでした。

せめてオチだけでも読まれないよう、
「善処します」。

2、スベルカード

「ほう・・・文様つたら、ひどい。

私が水嫌いなことをしつてこつういづことをされるんですからあ」

ぶしゅん、とくしゃみをしながら椀は恨めしそうに空を見上げる。

すでに彼女の姿はない。見えるのは黄昏。里におりていたカラスタ
ちが

山に帰り、森の動物たちが今宵の終わりを知る時間帯。

森は影をのばす。伸ばして伸ばして、空の闇と地平線で融合してい
く。

ルートヴィツヒは胸をゆつくりと上下させ、ため息を吐く。

眉間には皺がたまつたままだ。

「…上官か。苦労するな。」

「一応そうかもしれませんが。」

「適当だな」「そういうものですよう」

なんとなく男は髪の毛がくるりんで「パスター」と
叫んでいる男を想像して、うなだれた。

「…貴様の出来が悪いのを文は見かねて鍛えている。そういうことではないのか。」

非科学的なものをみせられていかんせん解せないが…そもそも」

「わー！やめてください！アレルギーがでますよう！」

椀は大げさに両手をふるった。

「…それよりも、えっと。ルートヴィツヒさんでしたっけ？

もうすぐ暗くなります。妖怪がでますよ…私も妖怪ですけど。

とりあえず私の家、というか別荘で暗闇をしのぎませんか？」

わたわたと尾を振りながら袖の合間よりチラリ、ルートヴィツヒの顔をみやる。

彼の顔はやや不服そうながらも椀の言葉に同意する、

と断言しそうな分かりやすい顔であった。

首をかしげてみる。威圧感に少しだけ逃げたくなった。言葉を探す。

「あ、えっと…。ここは天狗の住処です。天狗には人間と同じ社会があり、

それを乱す者を容赦なく排除します。私や文様はそんなに気にしないのですが

上に見つかつたら何を言われるかわかりませんし、あなたの身も危ないと思います。

だから、ね。はやくいきましょっ？」

「…分かった。貴様のいうとおりによっ。」

胸をなでおろす。が、

「その”別荘”までは”瞬間移動の術”という

古典的オカルトなものでつれていってくれるのだろうか？」

その眼は笑っていなかった。

月がすっかり頭上に頂いたころ。二人はようやく「別荘」にたどりついた。

「うえええ・・・ひどいですよ、うとヴいっひさあああん・・・ぐすぐす」

「こっちのセリフだ阿保！まさか歩いて10分のところまでそこにいくのに」

50回以上移動した！なんというムダだ！」

「ひえええ、おこらないでくださいいっふええ、文様にいじめられるっ」

狼耳をへたりとたらしながら蒼眼を見上げる。幻想郷にはないものを感じるも、

いっぱいいいっぱいの椀にはそれがどういうものか、偵察する気にもなれなかった。

大げさなため息はルートヴィッヒ。両手を腰にあてている。

「まあ生きているからよしとする。

科学的ならば手助けはできるがそう「術」やら「マホウ」やらは

ないものと思つて生活していたからどうも・・・」

「嗚呼、ここにくる”外”の人はみんなびっくりするみたいですね。私たちはその”魔法”を普通につかいますよう。みんな魔法使いみたいなものだけど、

魔女とか吸血鬼とか核爆弾みたいな人とか、たくさんいますう」

「年中ハロウィンかここは」

眼を遠くにスライドさせながらルートヴィツヒはぼやいた。

だれもこれも”少女”なのですけどね、と椀は彼に聞こえないように付け足した。

「と、夜も更けてきましたね　　そうそう。ここの主たる大妖怪が定めた

”外から人のためのガイドライン”というものがあるので、それをあなたにお伝えしますね。

しなないためにも絶対に聞いてください。」

区切りをみて、少女は指をびん、とたてた。巨大な木の中の空洞を利用してつくられた

この「別荘」は二人が入ってもまだ余裕があり、中央の囲炉裏が内側から木を照らしている。

・・・周囲の木々が燃えないのは、何か仕掛けがあるからだろうか。すべてを一度外に放り出すように、

ルートヴィツヒは思い切り両手であたまをかいた。

「文様からもきいたとおもいますが、

ここは日本の一角にある幻想郷と呼ばれる場所です。

旧約聖書でいえばエデンでしょうか。

まあここには沢山の神々や妖怪もすんでいるので
少し違うかもしれませんが。

近代化する前に龍神が作った”箱庭”だという説が今は有効ですね。

「

ルートヴィッヒは首をひねらせる。手をあげ

「・・・質問だ。妖怪とはなんだ？神は一人ではないのか？」

男の言葉に少し考えた後、椀は手をうつ。

「そうでしたね。日本の外には神をひとりしかもたない宗教があると
霊夢さんから聞いていました！

難しいですね。日本では”八百万の神々”と
いって
すべてのもの、

ここにあるものでしたら囲炉裏の炎からこの木々、
そしてルートヴィッヒさんと

私にも神が宿る、という発想です。

人間は神から切り離された”分け御霊”を頂いた神の分身。
多神教的な考えです。

どうしても理解できない場合は貴方の神は見えない神様で、
その神様が自分の意思をつたえるためにつくった

大天使のような伝令役が日本における神様だと
考えてください。

妖怪は必ずしも人間に組するとは限らない天使とすれば分かるで
しょうか。

まあ中には悪魔みたいなものもありますが・・・それでいいでしょうか？」

「神が多数いるとは・・・ややこしいな。概念として理解ができない。」

あぐらから座りなおしつつ、

ルートヴィツヒは苦虫を噛み潰したような顔をした。

椀が笑う。悪意のない、小さい子を見るかのような明るいものだった。

「すぐにわかります。とにかく、人よりも

妖怪・精霊・神の多い場所だと思ってください。」

「・・・うむ。」

「そしてそれらは人間を主食とするものも数多くいます。

そのままでは危険です。」

ふわふわと囲炉裏の比が揺れ、影が木の壁に優しく写る。

椀の影は懐をあさるように動き、二枚の札を取り出した。

黒髪の青年の顔がうかんだ。名前は思い出せそうで、だせない。

「そこで。スペルカードについてです。これが

【ちょっと苦しい思いはするけれど妖怪・精霊・神にあってもしぬ確率が低い唯一無二の抵抗手段】といえましょう。」

「スペルカード・・・」

「はい。ところでルートヴィツヒさん、

貴方今”自分にとって一番大切なもの”をもっていますか？」

唐突な質問にはとが豆鉄砲をくらったような顔になるルートヴィツ

ヒ。

無意識に左手が触れるのは胸を飾る十字架、なんといいのかわからないこれは

右手が触れるのは、ウルサーPPK。ハンドガンだ。

弾が入っていないのか、とても軽い。

椀が頷く。

「バカらしいとおもつかもしれませんが、今夜。銃のほうにこれ（そういった一枚の札を取り出した）を

はりつけて札に名前を書いてください。自分の名前ではなくて、たとえば

”迷札【太マツチヨ大行進】”とか

「貴様ネーミングセンスがないな。」「・・・こほん」

大げさに咳払いをした。

「貴方の性格、環境なんでもいいです。貴方に関係のある名前をつけ、その名前から連想するものをイメージしてください。

それが”スペルカード”になります。十字、つていうのでしょうか。

それは貴方の”中心”となります。そこに”弾”があたると、

貴方の体力は大きく削られます。」

「・・・わけがわからない。」

「今日はそうかもしれませんが、

ちゃんと今日いわれたことをやっていてください。

理解できなければ、貴方は妖怪のえさになるか

・・・弾幕にあたって死にます。」

「あ”？」

珍妙な顔で杖を見やる。

尻尾をまたの間につめながら杖は首を反射的に振った。

「おおおおお、おこらないでください……本当のことですう。とにかく、最低三つ護ってください。

食べられそうに、殺されそうになったら

弾幕勝負を申し出ること。相手の弾幕を徹底的に避けること、つまり十字架にあてられないようにすること。

最後に三回十字架に当たったら相手の言うことにそれなりに従うこと。

スペルカードの”通常弾”ならすぐ

できますでしょうからいいですけど「特殊弾」は難しいですからねえ、

とにかくよけてくださいいい……」

【雑音】

「私の体温はうけとめて」「は？」

口から漏れる言葉、椀が男をいぶかしげにみやっている。どうやら男が発言したものらしい。咳払い、男のターン。

「まだ混乱しているだけだ。

・・・つまりその”弾”をつくればいいのだろうか？」

「ええ。そうです。そしてそれに名前をつけてあげてください。
”名は体をあらわす”とはよくいうものですから

名前次第では人間でも妖怪が太刀打ちできないものを作ることも可能です。

貴方に関係のあること、貴方が大切だとおもうこと
・・・それをつきつめれば、分かると思います。」

そういうことで私は帰りますねえ、とへにやり。

顔を緩ませる。立ち上がる。あくびをして。

男に「はじめてのスペルカード　　〈独語V e r r .
と描かれた本を手渡した。

「これ、あげます。ここにおいてあったのは

日本語と英語だったきがするんですけど、

なんかあったのでおいておきますねえ

昔ドイツ人がきたのかもしれないね。まあどっちでもいいですv」

「あ、ああ・・・そうだな」

「夜が明けたらご飯もって迎えにいきます。トイレは隣の木、水は
瓶に汲み置きがあります。朝がくるまで

絶対に外にでないでくださいね。」

「分かった」

「では、ルートさん。今日はゆっくりやすんでください
おやすみなさい」

おやすみ、という前に楯はいなくなっていた。
少しだけ顔を外に出せば、漆黒が月に消えていくのが見えた。
どこかたよりない。よろよろしている。眠かったのかもしれない。

「無理をさせたか・・・」

影を見送り、一人きりになった空間を見渡す。

まるで野外キャンプ。「FUTTON」のようなものもある。
が、今宵は眠れそうにない。

ここにきて24時間たっていないが、疲れよりも
不安のほうが強かった。片手で頭を抱える。
眼の端に入るのは、左手にあるもの。

独語でかいてある「はじめてのすべるカード」。

眼を落とし、囲炉裏の前に胡坐を、かく。

作者は「YUKARI」という名前らしい。

一枚一枚丁寧にめくる。ルネサンスヨロシクの美しさに
時折圧倒されながら、過去を思い出す余裕もなく。

目の前の「スペルカード」の世界にのめりこんでいくのだった。

2、スペルカード（後書き）

東方系の設定集이었습니다。すこしずつUPしていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4769i/>

東方望郷夢

2010年10月12日18時33分発行